

叢談

カードの世紀

第214回

もういいかげんに「チャージ(Charge)」はやめよう

基本語彙のあるべき姿についての提案

櫻井 澄夫

目/に余る「チャージ」のまん延

私は3年ほど前に引越して、JRの戸塚駅前から10分ほど江ノ電のバスに乗って自宅に帰る。

バスに乗ると、毎回、「カードには事前チャージをしてください」との放送が車内に流れる。バスの乗車には満足しているが、この「チャージをしてください」というアナウンスは正直に聞いて気に入らない。

この連載を毎月お読みいただいている方はお分かりだろうが、プリペイドカード等に入金することを「チャージ」というのは、英語の誤用である。「Charge」という英語には、「請求する」という意味はあっても、「入金する」という意味はない。言い方を変えれば、私が不満なのは、本来の語彙、語義を無視した日本人の勘違いによる「和製英語的」表現であるからだ。

この連載では以前からこの業界で使用されてきた各種の用語、とりわけ「片仮名言葉」(以下、カタカナ言葉)、「外来語」「和製英語」「疑似英語」などと呼ばれる言葉について辞書や専門書、各社の印刷物、政府機関の使用例、ウェブサイトを調査して、その明らかな誤用、乱用、使われ方の違い、疑問などに言及してきた。その中で、学者、言論人、文化人から、市町村や一部の政治家などによる「カタカナ言葉」の批判、批評、言い換えの提案などについて具体的な事例をあげて、私見を述べてきた。私は特にしばしば話題になる「カタカナ言葉」全体というより、これまであまり言及されることがなかった本誌の読者の皆さんにとって関係が深い語彙や業界に焦点を絞り、著述してきた。

しかしながら、私が本誌などで、適当とは思われない、あるいは明らかな誤りを、あえて企業名などを記載して指摘しても、残念ながらあまり改善や修正が見られないことが多い。しかしながら、私の指摘を受けたからなのか、たまたま私と同じ問題意識をその企業や機関が持つに至ったからなのかは分明的ではないが、この数年、交通系ICカードを発行する一部の大手企業によって、目立った「変更」「改善」が行われているのも事実である。

そこで今回は私論をもう一歩進めて、問題の「指摘」から、改善の「提案」にまで踏み込むことで、そういった「好ましい」傾向を加速させるために一石を投じたい。

「カタカナ言葉」は、いかにして広まったか

明治維新を契機に、政治、法律、文化などの分野で、英語を中心とした外国語(西語)が一挙にわが国に流入してきた。その多くはいわゆる「和製漢語」

という形で明治の日本人の手で日本語化されたが、日本語では片仮名、平仮名、つまり「かな(仮名)」という便利な文字が発明されていたので、漢語化と並行して、西洋語を翻訳せずにその「音」を写しとるという手法で日本語化することが常習化していった。

その傾向は次第に強くなり、翻訳せずに、片仮名などにより音のみを写しとり、表現するということが一般化した。それが「カタカナ言葉」の主たる発生原因であったといえるだろう。しかしながら、そこに間違いも生じた。

中国語においては、「かな」がなかったため、西洋語の音その読みを持つ中国語の漢字に当てることもあったが、主として翻訳することによって漢字化、つまり音ではなく、意味を持つ漢字、表意文字に変換されたわけだ。

当時、日本は西洋化、近代化

が中国より先行していたから、欧米の文化や技術や制度と共にそれを日本語で表現した「和製漢語」は、中国から日本にやってきた多くの留学生などにより中国に持ち帰られた。いままでは、多くの中国人は日本語由来であることも忘れて、あたかも元からの「中国語」の語彙であったかのように使われている。

その一つが、明治期に生まれた英語の「Credit」の訳語(和製漢語)である「信用」だ。この「信用」は、それまで日中で使用されていた「信用する」というときに使う「信用」とは意味が違うにもかかわらず、西洋語から生まれた「和製漢語」であることを現代の日本人も、中国人も忘れてしまった(これについてもすでに述べた)。

さて、日本においては、翻訳しなくともすぐに使用できるゆえに、「カタカナ言葉」が次第に日本語の中で大きな位置を占めるようになっていった。その

傾向は先の戦争以後より顕著になり、「カタカナ言葉」が無制限に社会全体を覆うようになっていたのである。

この動きは、敗戦によるGHQの占領政策によるものとの見方もある。

翻訳せずに、西洋語を片仮名表記する行為を、「他殺でなく、言語自殺」と呼ぶ人もいる(文化国家で言語自殺する国はまれだろう)。

しかしながら、敗戦後は西洋語を使った方が「かっこいい」とされ、敗戦のショックからか、近代化には西洋化が不可欠、西洋化は善なるものと、「鬼畜米英」を忘れ去って、かつて日本を支配した中国文化がぶれに続いて、日本は欧米化を急いだ。

氾濫する誤った

「カタカナ言葉」

「カタカナ言葉」やその原型である西洋語がいかにたくさん

使われているかは、街を歩けば容易に分かる。それは「植民地の景色」とも呼べるだろう。

確かに「かな」は便利だ。外国語を直ちに文中や会話で使用できる。歴史的にはその効用を評価すべきだろうが、その使用方法には十分な言語的な配慮が不可欠である。音に基づいて文字を「変換する」だけだから、熟慮した上での言語的な配慮がないと、容易に誤訳が生じてしまう。だが、わが国の政府は、「カタカナ言葉」の問題などには介入してこなかった。

例えば、日本人が外国人に、「私の家は駅の前のマンションです」と言ったとしよう。実際は駅前にあったモルタル2階建ての「大衆的な」アパートだったとすれば、外国人がその家に訪問しても「マンション」(豪邸)は見当たらないから、迷ってしまうに違いない。

アパートの名前だけなら、ほとんど実害はないかもしれない。

(4) 原語の部分使用、省略、略称、部分的合体などによる「日本語化」

外国語の原型を崩してしまった場合や、意味が取りにくい形になると、意味が通じにくくなる。語義は原型を離れて、一層分かりにくくなる。「アプリ」「スマホ」なども勝手に日本人が外国語から作ったものといえなくもない。意味が次第に不明になると、崩れた外国語から日本人が新たな言葉を発明したりして、原型から一層離れてしまうケースもある。こうしたものは、外国人相手には使用できない。

(5) 原語風の表記の作成



▶JR駅の「チャージ」。(写真)

い。しかし、金融とか、決済とかという分野や基礎語彙ではそうはいかないだろう。

「グルメ (gourmet)」という言葉がある。「B級グルメ」などというときに使うが、グルメもグルマンも美食家や食通などの「人」を指す言葉であって、食べ物の意味する言葉ではない。ところが、日本では、テレビ番組もマスコミも市町村さえも、食べ物にも人にも適当に使用する。

さすがに正しい英語を使う人は、著書などで「グルメ」を正しく使用している。古くからクレジットカード業界にいた人ならご存じだろうが、かつて毎年新版が出版された「グルメのメニューブック」というレストラン案内があった。

この本は、早くから、紹介するレストランなどのカードが利用できるか、店ごとにマークを入れていた。いまでは珍しくもないが、私が知る限りこの本がない。

あたかも西洋語のようなつづりの用語を作成・使用する。原語風のつづりや、片仮名のつづりであっても原語なのか和製西洋語なのか判断が困難に。疑似英語、偽装英語ともいえる。文化の破壊につながる。意味が不明に。実は日本人なのに西洋人を装うのと同じ。

いま、粗上(きずじょう)にあげられた言葉が、これらのうちどれに属するか考えることは、そうした言葉をより好ましい形に変えていくためにも必要な作業になるだろう。

「カタカナ言葉」がもたらす混乱

こうしたものが片仮名、アルファベットの双方で混在・使用されると、その言葉が上記のどのような種類に属するのかわ別が困難になる。和製の語彙が西洋語の文中に混在すると、言葉の国籍、氏素性がさらに不明になり、混乱を来す。外国人にも

早くから実施していて、その後のレストラン案内はこの本の後に続いた。

最近テレビ番組などでよく聞く「ポリュミー」というのも不思議な言葉だ。誰が作った言葉か知らないが、勝手にポリューム (Volume) という英単語に接尾語の「y」を付けて形容詞 (Volume?) にしてしまったらしい。

おかしな和製漢語、カタカナ言葉を分類する

ここで、西洋語や外来語に由来する「カタカナ言葉」と、使用されている言葉の種類の間を私なりに整理してみよう。それには翻訳語や和製漢語を含む。

(1) 西洋語の片仮名表記

原語に近い音の片仮名で表記する。原語に近くない日本的な発音が発生すると、ひどい場合は原語が分からなくなる。その場合、意味は日本語に移すこと

はできない。

(2) 西洋語の漢語への転換

いわゆる和製漢語。近い意味を持つ既存の漢語を充当させる場合と、従来から使用されていたとは言い難い熟語漢字により作られ、選ばれることがある。その場合新語として使用されるから、見かけ上は意味が分かりにくいことはないが、新たな定義は必要。科学用語などに多い。「Peninsula」の「和製漢語」である「半島」などがこれに相当するか。中国語となった和製漢語も多い。

(3) 誤訳・誤解

西洋語の意味するものと日本語訳が違ってしまふ。同名異物。異名同物。生物、物産などにも起こり得る。誤訳は転用されると被害は広範囲に及ぶ。(辞書など) 意味が通じにくくなる。最も問題が多い。拙稿では、クレジットカード、キャッシング、チャージ、キャッシュレスなどが該当。

用例から理解するチャージの正しい意味

さて、今回は、「チャージ (Charge)」という「カタカナ言葉」が主題である(写真)。

すでに何度も述べてきたが、チャージとは「入金」ではなく、「請求」のことだ。カード業界にいる人なら誰でも知っているように、チャージカードとはT&Eなどの1回払いのカード。それに対して、時代によって意味の変化が見られるが、クレジットカードとは、普通、リボルビングなどの分割払いが利用できる銀行等が発行するクレジットカードをいう。また、チャージバックとは、吉元利行氏の本誌の連載で書いておられるように「代金請求の差戻し」のことである(「決済サービス法の基礎知識」22年12月号)。

請求された金額を支払拒否するか、代金を取り戻すことだ。また、国際ブランドの「マス

「ターカード」の旧名は、「マスターチャージ」だが、おそらくはチャージカードという名称は、リボルビングを主な収入源とするバンククレジットカードとしては適切ではないという判断から「チャージ」（請求の意）を後に取り去ったものだろう。

カード業務に世界的に定着しているこのような用語の意味、定義を無視することに対して関係者や関係企業は何も疑問を感じないのだろうか。チャージの使用のみでは飽き足らず、ポイントチャージとか、「〇〇チャージ」とか本来の意味を離れた言葉や「無定見に」増産する。こういうのこそ「国籍不明語」「和製英語」と呼ぶべきであり、はつきり言うが、英語から見たら「インチキ英語」ということになる。

東京メトロも ついに変えた

チャージが「入金」を意味し

ないなら、英語ではICカード等への入金を一般的に何というか。

アメリカ、イギリス、そして長くイギリスの支配下にあり、英語が公用語であった香港での実情を調べてみると、「Refill」（アメリカなど）、「Reload」（Load）「Add Value」 「Top up」（イギリスなど）、「Recharge」などがある。中国語では、「充值」「増値」などという。「充值」の「充」を見ると、充の字は「充電」などのように日本語でも使用されているのに気が付く。この言葉は「チャージ」に代わって使用する候補にはなるだろう。

連載の145回（17年6月号）でご報告したが、17年前半ごろ、東京メトロの各駅の券売機の「Charge」表示が一斉に「Recharge」に張り替えられた。

小さな文字だが東急東横線の券売機にも「Add Value」の文

字を見つけたし、「Recharge」「リチャージ（Recharge）」も増えてきた。「Top up」を最初に見かけたのは、10年ほど前の浜松町のモノレールの駅の券売機であったと思う。その後、東京メトロの変更を高く評価するとのブログを書く人がいるのにも気が付いた。見ている人は見ている。

なぜ「請求」が 「入金」になったのか？

しからば、なぜ、請求を意味するチャージが、日本では入金という意味に転じたのだろうか。

これは多分に車のバッテリーチャージ、バッテリーチャージャーなどの影響だろうと推測する。車の電池に電源から電気を流すことを前述のごとく「充電」というが、おそらくそれをまねてICカードに入金することもチャージという言葉を使用した人がいたのであろう。ある

英語学者のご教示によると、「チャージャー」は充電する機器だが、電気を入れるために使用するというより、電源から電池に電気を呼び込む、あるいは負荷を与える機器という考えではないかという。英語ではChallenge、Defeatなどに同じような性格が見られるという。チャージという言葉の別の使用例を身近な例で考えてみよう。

レストランの「テーブルチャージ」（カバーチャージ）は、お客が自主的に支払うというより店から請求される料金、という考え方が可能だろうし、サービス料も店から「請求される」ものだろう。「燃油特別付加運賃」など、各種の「サーチャージ」というものも「請求されるもの」といわれれば納得する。

中国語にも同類の語彙があることを知った。引用させていただこう（一部省略）。「中国語のカウ（買）とウル（売）は声調

（高低アクセント）の違いがあるが、ともにmai（マイ）という音である。これは同じ行為をどちらから見るといって問題で、その差は買う側と売る側の立場の違いだけである。そして、中国語ではカイルとカスはどちらも「借」で同じなのだが、カウ、ウルのことを考えると別に不思議でもない」（カウとウルが同じ音）荒川清秀著『漢語の謎』（ちくま新書、20年）所収）。

賢明なる読者の皆さんの中には、前述した英語学者の指摘を思い出す方もあるだろう。チャレンジ（挑戦）はするの、されるのか双方で利用可能な、立場の違いにより利用可能な言葉ということなのだろう。

追加入金といえど 誰にでも分かる

結論を急ごう。ICカードへの「入金」を英語では「チャージ」とは慣用的にも言わない、

使わないのだ。見渡すと、そういう言語習慣は実例として世界のどこにもないだろう。漢語の充值、増値に相当する日本語といえど、「追加入金」、券売機に表示された「ICカードチャージ」に従えば、「ICカード追加入金」あるいは、広く日本の各地で使用されているのが認められる「積み増し」が誰にも分かりやすく、意味にも「混乱」や「迷い」を生じさせないだろう。これが私からの提案だ。

なお、前に「積み増し」の国内での使用例についてこの連載でも触れたが、鹿児島市、岡山市、北陸鉄道、南海電鉄、伊丹市、下電交通局、岐阜バス、京都市、熊本市、奈良交通、名古屋市、福島交通、南国交通、山梨交通などでこの言葉が使用されている。

ネットを見ると「チャージってどういう意味ですか？」などという質問もある。

こうした疑問は私が提案したような語彙の完全な日本語化によってほとんどなくなるだろう。英語の表記は本稿にあげたような、各国で使用されているものに学び、それらを採用するしかないだろう。本来外国語であった用語が日本国内で使用される際に、外国語の意味や使用例に学ばないのは、傲慢、独善的であるときえ私は思う。

「カタカナ言葉」の使用には 注意を払うべし

外国語に由来する「カタカナ言葉」の使用にはもつと注意を払うべきであって、政府機関や業界がこぞって言葉の標準化や、法制化、法律用語としての整備に努めないとならない。そうした努力を継続している国がすぐそばにもある。そういったときに世界でも特異な文字である片仮名への理解は不可欠である。拙稿が関係者の方々に少しでもご参考になれば幸いです。

なお、フランスはフランス語の保護のために、16世紀ごろから国家が政策を施行し、1994年には、フランス語の使用に関する法律を制定し、地域語や外来語に対する規制を表明している。それに比べると日本の実情は「野放し状態」であるという（NHK放送文化調査研究年報40。95年）。

最後に、この連載で「チャージ」に関して論じた主要な回を以下に示し、参考に供したい。
122回（15年5月号）、123回（15年6月号）、124回（15年7月号）、125回（15年8月号）、126回（15年10月号）、140回（17年1月号）、142回（17年3月号）、145回（17年6月号）、146回（17年7月号）、149回（17年11月号）、150回（17年12月号）、155回（18年5月号）、175回（20年3月号）、178回（20年6月号）。